

小学校は
エンピツの
匂い

東京学芸大学教育学部 附属
小金井小学校 同窓会

撫子の会

6

もくじ

会長メッセージ……………2

母校新校長・副校長ご挨拶……………2

開きました！ 同期会クラス会……………3、5

先生の計報……………5

特集「火山・三宅島の話」……………6、7

投稿欄●エンピツの匂い……………8



●会長メッセージ

「撫子の会、責務重し」と心に掛ける毎日

会長 藤田暉夫 昭和十九年豊島卒

平成十四年五月に開催した「撫子の会」第三回総会で新理事十一名・監事二名が選出されて一年数カ月になりました。この間の活動をご報告します。

- 1・平成十四年六月／理事会を開催／新理事会の運営について討議
- 2・同六月／母校に藤原（前）副校長を訪問／同窓会と母校の協調方について意見交換、検討
- 3・同十月／母校運動会に出席／生徒の活躍、父母の応援に感動。この絆こそ大切と痛感
- 4・十五年二月／理事会開催／今年度の会の展開について討議
- 5・同五月／母校に新校長・新副校長を訪問／当会の内容と役割について説明。学校法人化への動向を聴取・協議
- 6・同七月／理事会開催／これまでの運営検討と今後の実質的展開について協議

以上が概要です。そして今秋十一月二十二日（土）、「撫子の会 第四回総会・懇親会」を中野サンプラザで開催することにしました。

現在十三名の役員が各位特有の力を発揮され、会務は何事も停滞することなく活発に遂行されていることも、ここに合わせてご報告します。

会長としては、時折訪れる緑多き母校小金井小学校、撫子の校章を胸に嬉々として走り回る生徒たちを目にするにつけ、「撫子の会の責務重し」と、心に掛けてある毎日であります。

●母校から（ご挨拶）

同窓生の熱い思いに感謝

小金井小学校校長 大竹美登利

この四月に着任し、右も左も分からぬまま夢中で過ごしてきましたが、すでに二学期になりました。そうした中で、特に卒業生のすばらしさを通じて、小金井小学校の良さを実感した日々でした。

もちろん、卒業生が社会的に活躍なさっていることは言うまでもありません。私が感じたのは、そこではなく、同窓生が小学校の生活を良かったと感じ、誇りに思っていることです。また、そうした熱い思いが、現在の小学校の教育活動を支えてくださっていることを、改めて認識いたしました。



生徒に語る大竹校長先生

一字一、至楽の生活が、本校の教育の大きな柱になっています。本校の教員だけでは安全で有意義な生活は支えられないのですが、これらに、助手として多くの卒業生が協力してくださっています。自分たちを育ててくれた生活の後輩たちにも伝えたいという熱い思いが、生活生活をよりよいものになっています。

また、PTA役員会である学校委員にも多くの同窓生が役割を担ってくださっております。現在、どこも改革ばかりで、本校でも例外ではありませんが、同窓生たちは自分たちが受けた良き伝統を守りつつ、時代にあつたよりよい学校にしていきたいという思いに支えられ、積極的に関わってくださっております。改めて感謝申し上げます。

●母校から（ご挨拶）

13943の輝かしい歴史

小金井小学校副校長 小林正道

今春の卒業証書の最終番号は13943号でした。豊島、追分の流れを引き継いで小金井小学校が開校して以来、九四年の輝かしい歴史がここにあります。

大きな社会情勢の変化の中で、縦横のつながり、より多くの情報を手に入れるアンテナを持つことが必要な時代になってきています。このような時代こそ本校の同窓会活動を活性化し、会員相互の情報交換が役に立つことと思います。卒業生は、どの期の誰とでも連絡がとれるように「名簿」が幹事の方々の努力で整備されています。一人の「点」のあなたも、「名簿」を介して同じ領域の同窓生と「線」になるよう同窓会を活用されてはいかがでしょう。

新しい時代に飛躍する学校づくりを目指して教職員も一丸となり、充実した学校づくりに努力していきたいと考えています。同窓会「撫子の会」の皆様には、これにご理解いただき、なお一層のご支援をお願いいたします。

「撫子の会」の発展と会員の皆様のご活躍を期待しています。

開きました！

同期会

クラス会

昭和十五年卒

花の二十九回生・同期会(豊島)

一年ぶりに昔のお坊ちやま、お嬢様方、脳の側頭葉、前頭連合野の訓練とばかり音声多重放送さながらの様相…、世に粗大ゴミと称される面々「ナヌツ！ 老人会なんて言わせないぞツ」とばかり怒り心頭！ 再利用の価値ある資源ゴミを任じている有能な喜寿連中…、何はともあれ生活習慣病と戦いながらも七十年近くのお付合いを大切に大切に想い、互恵的利他主義と生き抜いている戦中派の輩です。動員に明け暮れ、空腹を抱えながら一寸先の生命も判らない青春時代。美しく盛り付けられたお料理を、オナカ一杯頂けるなんて…、あの頃は想像だに出来ませんでした。

当日は生憎、終日雨でしたが、皆様窓外の緑と共に活き活きと輝き「水も滴るいい男」「ビジョビジョの美女」を演じました。「夜目遠目、傘の内」って言葉もありましたっけ！ 上を向いて歩くと足元が覚束かず躓くであろう我々は、専ら前を向いて歩きましたよ。

「青春とは人生のある時期では無く、心の持ち方を言う。歳を重ねただけで人は老いない。理想を失う時初めて老いる。」

(編集部註：筆者は匿名希望。ビジョのお一人?)

*折込写真1

我ら三二会

昭和十八年豊島卒 秋山慎三

●我が会の名は三二会

豊島の附属小学校三十二回卒だからという、きわめて平凡な命名である。これは、クラスごとの会はそれぞれ続いていたが、同期の会はかなり歳をくつてからできたからだろう。若いと子供の名も、美月とか彩花などにつけたくなるが、歳をとると、松子や久子などがよくなるのと同じだろう。

●卒業六十周年記念の会・出席率五十一%

この三二会が、卒業六十周年記念の会を開いた。さすが先生は一人もお迎えできなかった。附属小学校を出て今年平成十五年で満六十年。そこで幹事が凝って、卒業した日の三月二十五日に、卒業した場所である池袋西口の東方会館。幹事の説明によると、ここは当時の第二運動場の一部とのことだった。六十年というのはどのくらい昔なのだろうと、年表を、卒業した昭和十八年(一九四三年)から遡って繰ったら明治十六年(一八八三年)で、あの鹿鳴館ができた年だった。西南戦争で西郷さんが死んで六年目である。

幹事の話によると、卒業したのは男子二組九十七人、女子一組四十七人、合計百四十四人の由。亡くなった人と連絡がつかない人(あいだに戦争があった)を足すと四十四人、従って残り百人、当日の出席者五十一人、六十年経ってたいへんな数字だと思ふ。もっとも、共に学んだ友人は卒業時にいなかった人も会員として誘っている。母集団はこれよりいくらか多いのだが、それにしても四十数パーセントは大した数であることに変わりない。

●思い出の品々

女子の三年生の時のお習字の綴じ込み、卒業写真、海の至楽荘や山の一字荘の写真など、思い出の品々を持ち寄って展示した。空襲で焼けなかった物がこれだけあるのに、なぜか通知表が一つもない。出来がよくても悪くても、成績というものは七十を過ぎてもあまり見せたくないものらしい。

●友達の話

何人かが子供の頃の思い出話をした。そのなかにこんな話があった。二年生の時、先生に「好きなように円を描いてごらん」と言われて、一人が、一点を中心に同じ長さの線を無数に引いて「できました」と言ったそうだ。六つや七つでこんなことを考えるヤツが隣の席にいたのかと思ったら、背筋が寒くなった。

●女性たち

女性はきわめて元気である。出席率も、生存率も男性の約二倍。統計の通りだ。この世代の女性は、結婚相手の世代が戦争で百万人単位で亡くなったため独身者が多く、社会問題になったほどなのに、名簿を見ると結婚している人が非常に多い。これが豊島の附属のせいなのか、男好きがする女性が多いからなのかは不明である。

●後悔

後日、三二会々々長から、当日の会の報告を書いて「撫子の会」の会報に寄せるようにと話があった。第一の後悔は「出来ることは協力するから」と調子のいい事を言って彼に会長就任を納得させたこと。第二は、こんなことになるなら、当日、その会長や友人の話をもっときちんと聞いておけば良かったと思

うこと。そう言えば小学校で、「人の話はちゃんと聞きなさい」と繰り返し教えられた覚えがある。小学教育は大切で。

●おまけ

幹事が気を使って、当日、我々が生まれてから卒業する昭和十八年までの簡易年表、校歌、いくつかの小学唱歌を載せた小冊子、それと、池袋西口広場にある「豊島師範と附属小学校発祥の地」を示す石碑の写真と校歌を染めた手拭いが配られた。なかには額にして壁に飾っておこうと言った人もいたらしい。後日、当日の写真と一緒に「校歌の歌詞に誤りが三方所ありました」という知らせがあった。少しも不思議に思わなかった。

*折込写真2

腰山先生と

写真家の松井君を亡くしました。

昭和二十六年追分卒 宮坂庸也

私達が附属追分小学校を卒業したのは、テレビ放送が始まる二年前の昭和二十六年春。その三十六年後の昭和六十二年に同期会を開始して、以後隔年に開催している。その開始の前年に、二人のメンバーが偶然に仕事で出会い、一時間ほど話してやっと同期生であることに気づいたのがきっかけで、同期会を開くことになった。

同期生のほぼ半数が附属追分中学校に進学し、その同期会がすでに隔年開催されていたので、必然、小学校の同期会はぶつからない隔年となった。

直近の同期会は昨年の暮、都内のホテルで開かれ

たが、二組の担任だった腰山太刀男先生のご健康が優れずご欠席との連絡があり、また、暮という時期も悪かったのか、サラリーマンは殆ど第一線を退いて暇になった筈なのに、首都圏在住者の約三十%、十八名と意外に低い出席率であった。しかしそれが幸いして、出席者同士が互いに話を交わせることになり、濃度が上がり、満足度は高かった。

話題は、毎回ご出席頂いて活発に皆を励まし、八十才を過ぎてなお若々しい、前向きな精神をお持ちの腰山先生をお見舞いしたメンバーからの「次回は出席するよ」と言われたとの報告に始まり、気の置けない竹馬の友として人生観や趣味などに及び、いつものように時間の不足を感じて帰途についた。

● その、昨年の出席者の満足そうな笑顔の記念写真を添えます。

今年の五月初め、腰山先生は他界されました。穏やかな死顔は、一生を教育活動に捧げられ、多くの人達から慕われた良い人生が象徴された様に思えました。ご冥福を祈るばかりです。

追記。本稿を脱稿して間もなく、同期会の人気者で広告写真家の松井亮君(写真の最後列中央の髯男)が、六月二十八日にカトマンズで、雨上がりの朝日に黄金色に輝く寺院を撮影中、事故で他界したとの報に接しました。

彼は十数年前からネパールの諸風景に関心を持ち撮影に通い、平成九年からはフランス、ユネスコ、ネパール王族の依頼を受けて、ムスタン地区の古い寺院の曼荼羅を撮影するなど、バリバリの現役で、平成十三年に「ムスタン 曼荼羅の旅」(中央公論社)を上梓し、近く次の出版予定もありました。さぞ無念だったろうと思います。ご冥福を祈ります。

*折込写真3

還暦祝いのクラス会

昭和三十年追分卒 武田純子

私たちは昭和二十三年から二十九年の六年間、ずっと松村先生に受け持っていたきました。みんなが働き盛りのころはクラス会が間遠になったこともありましたが、ここ数年は二年に一回ぐらいの割合で開いています。昨年からは今年にかけて、みんな無事に還暦を迎えましたので、二〇〇二年十月十九日に、東京会館でお祝いの会を開きました。

出席者は三十一名(男性十九名、女性十二名)で、これまでのクラス会で一番多く、ずっと消息不明だった方も探し出してくれた幹事の中川さん、山川さんの努力の賜物です。

幹事さんがコンピュータを駆使して、クラス全員の卒業写真や遠足、運動会、お誕生会など懐かしい写真をスクリーンに映し出してくれました。「全然変わらないね」「誰だか分からないよ」とわいわい言いながら写真を見ているうちに、すっかり五十年前の小学生に戻っていました。母親たちが書いた文集を持参してくれた人もいて、会場は懐かしさに包まれました。

毎回クラス会の写真は先生の奥様にお届けしていますが、今回は幹事さんが事前にご依頼にお参りして下さり、奥様のご近況も伺うことができました。



わがクラスは六年間、腰山先生に

昭和三十三年追分卒 松村直央

昭和三十三年追分校卒業のわがクラスは、六年間クラス替えがなく、一貫して腰山太刀男先生が担任だった。そのためかまとまりが良く、クラス会を毎年のように開いてきた。去年も十一月に、早稲田の腰山先生のお宅近くのホテルで、二十人近くが出席してクラス会を開き、「昔と変わらないね」などと言いつつ、お互いまだ若いことを確認しあつた。

しかし、肝心の腰山先生のお姿は見えなかつた。先生はその少し前にご病気をされ、回復なさつたものの大事をとって欠席されたのだつた。席上、どうしても先生のお顔を拝見したいという声が上がると、二次会のあと、先生のマンションに皆で押しかけた。病み上がりの先生は夫人に身体を支えられながらも、いつものように私たち一人一人の名前を言いながら声掛け、手を握ってくださいました。だが、サッカー、野球、水泳と元気一杯だった昔の先生の面影は無く、「次のクラス会を早くやらねば」と皆が思った。

その後、先生は今年に入つて再び病に倒れ、八十五才の誕生日を迎えて間もない五月五日に死去された。多数の教え子が参列した立派なご葬儀だったことは言うまでもない。先生のご遺影を眺めているうちに、教えて頂いた様々な事が次々に思い出された。自分のなかで一番楽しかった追分時代は、更に遠い過去に飛んで行ってしまった。

まだ、戦後という色が濃かつた昭和二十六年の入学時から、皆六十才に近くなつた今日まで、腰山先生に育てられ、励まして頂いて、何とか無事に歩いてくる事が出来た。先生、ありがとうございました。

*折込写真4

石の原会

昭和三十九年小金井卒 渡辺 成

石の原会は、昭和三十三年に豊島校に入学し五年間を一組で過ごした仲間のお会です。私達は廃校問題に翻弄され、六年進級時に三つの附属に転校した者と、母校に残つた者に分かれました。そろつて母校を巣立つことはできませんでしたが、故相原永一先生、今もお元気な石塚健治先生に薫陶を受けた、仲の良いクラスです。会の名称は両先生のお名前の一部をいただいております。

石の原会が本格的に活動を始めたのはここ十年ほどです。最近は一、二回集まつており、幹事のユニークな企画により趣のある集いになっています。例えば、故相原先生の募参を目的にした会、親を招待しての集い、遠足を復活させた企画、旧友を訪ねての北海道旅行など、枚挙に暇がありません。毎回のように参加して下さる石塚先生からは昔の秘話を聞かせていただけ、思い出を新たに作る会になっています。

その楽しい石の原会ですが、残念な事があります。それは相原先生をはじめ、酒井紀司君、津田昌克君、根本彰君、仲夢子さん、楠田裕子さんの五人の旧友を既に失つたことです。改めて先生と旧友のご冥福をお祈りし、筆を置くことにします。

*折込写真5

ワクワクした時間

昭和四十二年小金井卒 菅沼和江

私たち昭和四十二年卒業生は、昨年七月十四日、

南国酒家原宿にて、卒業以来初めての同期会を開きました。当日は三十人程の同期生が集まり、西村、高田、長谷、島崎先生をお迎えすることができました。初めての同期会ということで、卒業以来実に三十五年ぶりという面々も少なくありませんでした。が、すぐに昔を思い出して、ワクワクした気持ちで楽しい時間を過ごしました。

先生方をはじめ同期生も皆、仕事や家庭そのほか様々な方面で活躍している様で、今後どんな偉業を成す人が出てくるかと楽しみです。今回集まれなかつた同期生も各々充実した日々を送っていることと思ひます。また是非このような会を持てるよう折つていきます。

最後になりましたが、同期会を実現できたのは、昨年五月に行なわれた「撫子の会」の総会が契機となつたためでもあります。この場を借りて感謝申し上げます。また、同窓会の皆様のご健康と、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

*折込写真6

ご冥福を祈ります

・腰山太刀男先生 平成十五年五月五日ご逝去

昭和二十三年(追分) 昭和三十九年(小金井) 昭和四十六年

昭和四十四年 昭和四十六年の三年間本校副校長

・山内龍雄先生 平成十五年六月二十五日ご逝去

昭和五十三年四月 平成十三年三月、途中二年間
インドネシア日本人学校、本校ご在任二十二年

同窓生で火山学者の大島治さんに寄せて頂きました。
三宅島の2000年噴火の壮大な地球ドラマです。

特集

火山 三宅島の話

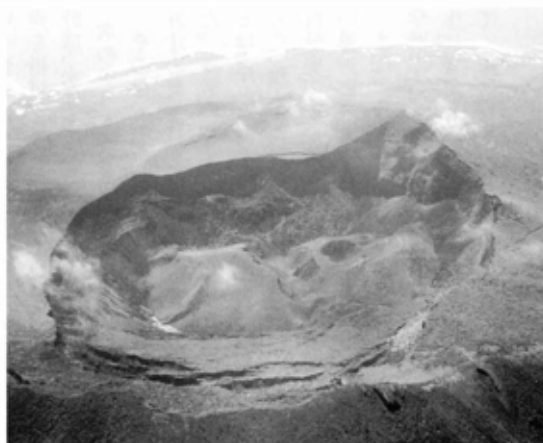
昭和29年追分卒 大島 治

日本一の山、富士山。それが火山であることは誰しも知るところだろう。四方に裾野をひろげたその穏やかで堂々とした姿は、古来人々に安らぎと畏敬の念を与えてきた。北海道の蝦夷富士（羊蹄山）、東北の津軽富士（岩木山）、南部片富士（岩手山）、伊豆諸島の八丈富士（八丈島西山）、九州の薩摩富士（開聞岳）をはじめ、日本各地にある「〇〇富士」もその多くは火山であり、それぞれ周辺の人々とその心に深いかわりをもっている。

国立公園の大部分が火山を含んでいることからわかるように、火山は美しい景観を人々に与えている。それだけではない。長い目で見ると、農業に適した肥沃な土壌、鉱物資源、地熱エネルギー、温泉、陸地の拡大など、多くの恵みを我々人類に与えてくれるかけがえのない存在でもある。短期的には時に災害の牙をむくこともあるが…。

私は40年近く大学で火山を研究し、火山噴火の現場に立って自然界の理（ことわり）の美しさと素晴らしさに魅せられてきた。その中から、ここでは三宅島の2000年噴火の話をしたい。

多くの島民が不自由な長期島外避難を強いられているなか、三宅島火山は目から鱗とも言える人類初体験の火山活動のからくりを見せた。2000年噴火は三宅島にとって約2500年ぶりのカルデラ生成噴火だった。いま三宅島の中央には直径約1.8km、深さ約500m近い陥没カルデラがある。この種のカルデラの出来方を目の当たりにするのは人類初である。カルデラとは、火山より大きな火山性の凹地地形をいう。それは多くの場合、大量のマグマを火砕流として短期間に噴出し、地下がいわばカラの状態になり陥没して出来る。しかし三宅島の場合、通常の火砕流はなく、噴出物の量も少なく、おまけにマグマに直接由来する噴出物も殆どな



陥没開始直後の三宅島山頂。中央火口丘「雄山」を中心に200m近く陥没、直径約1km。(2000.7.9.朝撮影)

しにカルデラをつくってしまった。似た例がハワイやガラパゴスなどにはあり、その仕組みもわかっている。しかし日本列島のようにプレートが沈み込む圧縮された場のものとは異なる。これを解くカギは地震観測や急速に進歩したGPS観測（カーナビ同様の、衛星による精密な位置決めシステム）などにあった。地表の噴火活動だけを見ていたら決して解らなかつたろう。GPSの精度が悪かった10年前でもこの謎は明解に解けなかつたかもしれない。三宅島は科学の進歩に合わせたように、その意味ではちょうどタイムリーに、活動したのである。

ここで三宅島のあらましを述べておこう。三宅島は東京都心から南へ約180km、伊豆諸島中程にある直径約9km、かつての標高約817m（2000年噴火後は700m）の円錐に近い形の火山島である。山裾が海底までひろがり、島は、実は水深約300～400mの海底から立ち上がる、直径15km以上の大型火山の海上部分である。日本の代表的活火山の一つで、伊豆大島、富士山などと同じく高温で低粘性（玄武岩質）のマグマの活動する火山として知られている。カルデラ生成は過去に少なくとも2回、約7000年以前と約2500年前に起きている。最近約500年間は、山頂が放射状の一方向に何キロにもわたって裂け、そこから一斉にマグマを噴き出す「山腹割れ目噴火」が特徴的で、世界的にも有名だった。これは、記録に残らない海底噴火も含めると、ほぼ20年余りの間隔で定期的に繰り返されてきたらしい。近年には、1940年、62年、83年の噴火がある。1983年噴火で延長4.5kmの割れ目火口列から溶岩が幾条にも流出し、海岸の一集落400戸余りが炎上埋没したことは多分多くの人の記憶に新しい。

2000年噴火は6月26日、前回から17年足らずの間



三宅島山頂カルデラ。直径約1.8km、深さ約500m。火口は南南東端にある。(2002.8.21.撮影)



山腹を下る火山ガス。有毒の二酸化硫黄を含むためこの中に人は住めない。二酸化硫黄の噴出量は世界観測史上最高。(2002.3.25.撮影)

隔で、山麓部の海底割れ目噴火として始まった。わずか一日以内の活動で終わったかに見えたが、その後がいつもと違った。強烈な群発地震が続き、震源は三宅島から北西の神津島方向へ移動していった。一週間余り後、三宅島山頂直下でも地震再開。そして7月8日夕刻、山頂で小さな水蒸気爆発が起きた。過去の噴火推移とは全く違う。

翌朝、私はヘリコプターで上空から観察させてもらうことが出来た。台風一過の晴れ上がった空から見る山頂の光景は一瞬息をのむものだった。これまで何度も歩き慣れた山頂が大きく陥没しているのだ。直径約1km、中央火口丘を含む元の地形がそのままリフトで降りたように200m近く沈んでいる。垂直に切り立った環状の境目に地層断層が露出している。陥没はハイペースで進んだ。沈み行く山頂の元の姿は数日で全く消え、8月中に直径1.6km、深さ500mの大穴となった。小型ながら紛れもない陥没カルデラである。その間数回の水蒸気爆発によって高さ1万5000mに達する噴煙が上がり、山麓の居住地域まで噴石が落下、周辺が火山灰に覆われることもあり、9月4日を期限に全島避難が実施されて島はほぼ無人状態となった。その後有毒な火山ガスが主役となるものの、火山活動の主要部分はこの時すでに終わっていた。

では三宅島は一体どうやって、大した量の噴出物も伴わずに陥没カルデラをつくったのか？ 地震観測やGPS観測は、肉眼では見えない地下の壮大なドラマを捉えていたのだ。機器観測によれば、地核にかかる圧縮力によって三宅島の地下は北西方向に割れ、その亀裂に地下の大量のマグマが貫入移動していったらしい。激しく起きた群発地震はそのためであったし、マグマが入り込んだ分、北西にある神津島と新島の間隔が80cm開いたことも観測された。貫入したマグマは

地下深いため海底に噴出することもなく、三宅島の地下のマグマ溜りはカラに近い状態になりかけ、その分真空ポンプで引くように山頂を下から吸い込んだのだ。傾斜計はその間山腹が計40数回も上下動を繰り返すのを観測、山頂が1日1~2回のペースで徐々に陥没していく過程も明らかになった。

明らかな前例もなく実証も出来なかったことが、いとも簡単に目の前に現実として展開されたのだ。人知を超えた大自然のドラマに畏敬の念を抱かずにいられない。実は、三宅島と同様に山頂に小型カルデラがあり、しかし火砕流のない玄武岩質火山は世界にたくさんある。そのカルデラの生成メカニズムの謎がこれで一挙に氷解し始めた。

このカルデラ生成噴火によって、従来の三宅島の噴火システムはリセットされた。特徴的だった割れ目噴火はもう当分起きにくい。今後はカルデラ底での活動の時代となる。カルデラの南南東端にある火口からは常時噴煙が上がり、最も低い北寄りの底には小さな湖水ができています。将来新たなマグマが上がってくる時は先ず水との接触でマグマ水蒸気爆発を起こすだろう。その後マグマのしぶきを上げ、溶岩を流すことになる。しかしこれはカルデラの埋め立てに使われる。深さ500m近くを埋めるのに千年以上何年かかるだろうか。これまでのように溶岩流が麓の集落を襲うようなことは、人間のスケール感ではもう遠い将来までないと考えられる。

現在、三宅島は地下の大マグマ溜りと地表とがいわば直結状態となったことで、ガスの放出が続いている。すでに3年になるが、徐々に減少し島民の帰島も時間の問題になりつつある。三宅島は今後当分は緑豊かな平和な島になるに違いない。

投稿欄 ● エンピツの匂い

抱卵のころ

昭和十五年豊島・二十九回女子組卒

長流短歌会編集委員 内野潤子(井口)

抱卵のころ忘れてゐし吾に

みどり児の写真姪より届く

胸深く刺さる一本の楔あり

触れねば静かにその位置保つ

春泥に深く残れる足跡の

一つ一つに溜り水光る

言いたきは最も言いてならぬこと

一人静の花穂に屈む

みづうみを背に写されし旅の写真

我に組む腕ありてよかりき

失いし時を辿りてわが歩む

車椅子の母重かりし道

桜散るこの道は彼岸に続くべし

時には近く時には遠く

しのび寄る幸せのごと目覚めたる

夜半枕辺に月光の射す

草に鳴く木に鳴く虫の声満ちて

露けき夜々を亡き母近し

一抜けた二抜けたと消えゆきし人

残されし吾に夕闇迫る

もの書きの父を思えば世に顕ちし

たまゆらの名の何ぞ虚しき

いやさるる優しきことば花びらの

ひとひらとなりわが胸に落つ

晴れわたり紅梅将にはころびんとす

わが生れし日の荷風の日記

己の悔い確かむる如く口中の

同じ処を幾度も噛む

元気の気あげると吾を抱きしむる

乙女の柔らかき胸吾を圧す

昭和三十八年追分卒 上山浩一

今宵 月下に桜を賞で

生の喜びを噛む

知らず 明年誰の影 (旧観瀨樓門前にて)

春雨 神社に桜の参道を敷き

麗人 社殿へ向かう

満願の札 (根津神社に於て)

八重桜 群青の空に映える日

日韓の若人 サッカーに死力を尽くす

日本勝ちたり (国立霞ヶ丘競技場にて)

● 編集後記

十一月二十二日(土)に中野サンプラザで「撫子の会/総会・懇親会」を開催する案内と同封するため、本号の編集は夏のこととなりました。

原稿をお寄せくださった各位に感謝します。

特集の「火山・三宅島の話」は、前号で予告した

「二隅を照らす友」として寄稿をお願いしました。

今号からの「投稿欄エンピツの匂い」は今後も続けます。詩歌、随想、同窓生へのお知らせ、紹介、モノクロでよければ絵画、写真など、鉛筆の匂いのお気持ちでお寄せください。ただし政治、宗教、商品、業務等の宣伝はご遠慮願います。あらかじめご了承ください。

「撫子の会」会報・第六号

発行 平成十五年十月

この号の編集担当

金子 修也(昭和二十五年追分卒)

西山マサ子(昭和三十二年追分卒)

印刷 山信印刷(山佐福栄・昭和二十八年追分卒)

投稿・寄稿問合せ先

西山マサ子 電話・ファクス 03-3815-9619

メール kmjy@icn-carv.ne.jp

同窓会事務局

東京学芸大学教育学部附属小金井小学校内

住所 〒184-8501

東京都小金井市貫井北町4-1-1

電話 0423-29-7823 ファクス 0423-29-7826

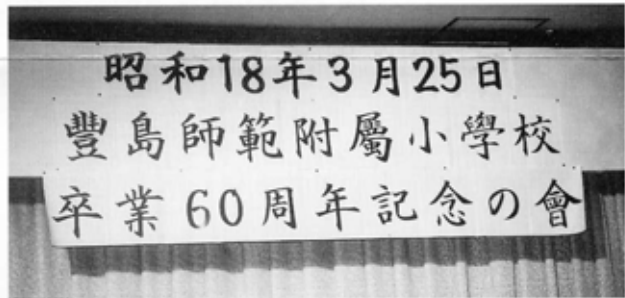
撫子の会郵便振替口座

番号 00100-8-709121

加入社名 撫子の会



開きました！
同期会
クラス会の
写真を
お寄せ
くださいました。



- | | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 5 | 3 |
| 6 | 4 |
- 1・花の二十九回生同期会
…豊島・昭和15卒
 - 2・我ら三二会…豊島・昭和18卒
 - 3・亡くしました、腰山先生と松井君
…追分・昭和26卒
 - 4・六年間、腰山先生に
…追分・昭和32卒
 - 5・石の原会…小金井・昭和39卒
 - 6・ワクワクした時間
…小金井・昭和42卒

